

佐賀の兵器史の中の

二つの輝き

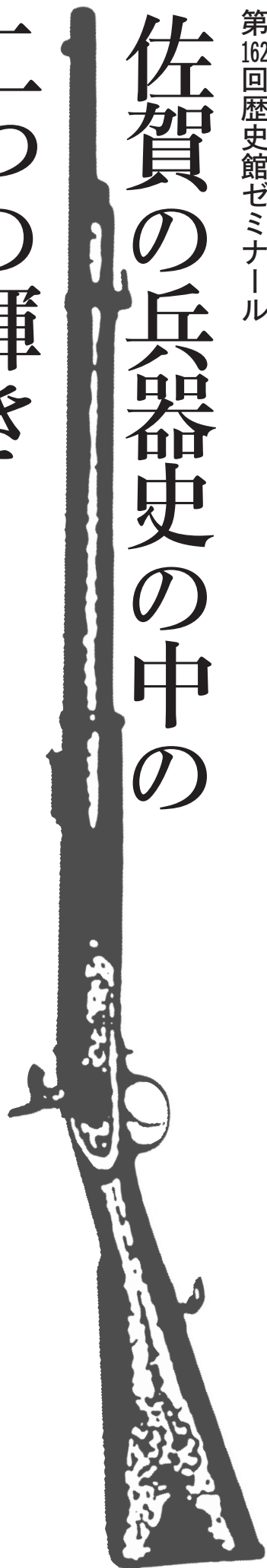
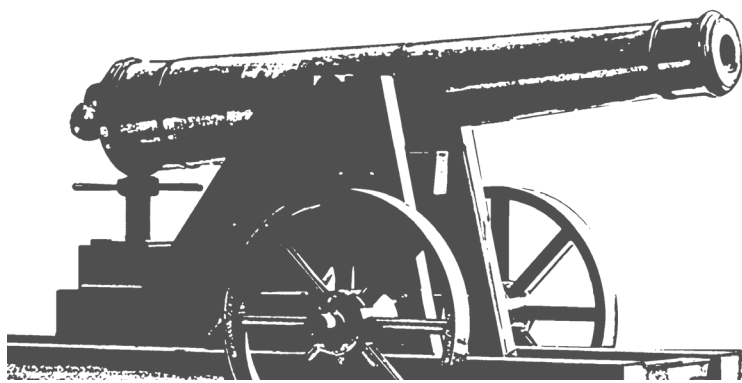
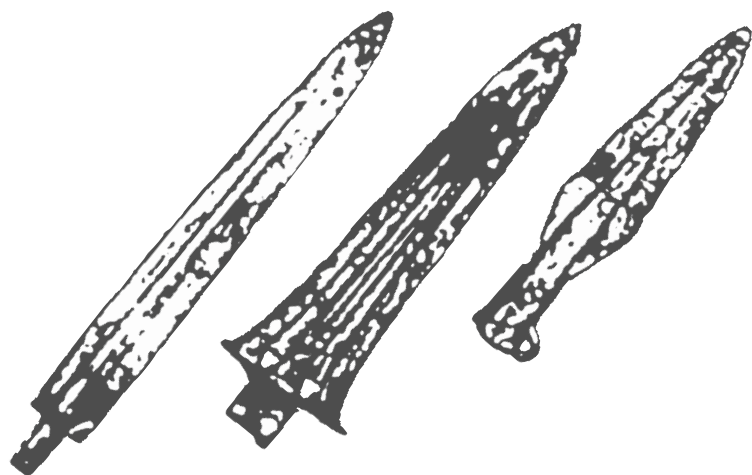
—— 弥生の冷兵器と幕末・維新期の火器を中心に ——

平成30年 **5月12日(土)**
13:30~15:00

講師 **七田忠昭** (本館館長)

場所 佐賀城本丸歴史館 外御書院

※聴講無料・事前申込不要



幕末の欧米列強に対する国防意識を高めた十代藩主鍋島直正は、最新の洋式銃砲の輸入、国産化によって軍備を充実させ、併せて銃砲術や銃陣の訓練を重ねさせて、佐賀藩を一大軍事勢力として雄藩へと導いた。これを遡ること二三〇〇年前の弥生時代前期後半、佐賀の地で国内初めての青銅器の国産化に成功し、次いで剣や矛、戈といった強靱な青銅武器が製造され、国内に青銅器文化を根付かせた。嘉永5年(1852)の鉄製カノン砲の国産化と、弥生時代の青銅武器の国産化は、いずれも国内初の出来事であり、日本の科学技術史・軍事史上の一大画期とされる。

弥生時代の秦漢魏帝国の版図拡大政策と、幕末期の欧米列強の植民地政策という、同様な対外緊張関係、危機感の高まりの中で、海外情報の入手に有利な土地柄を生かし、進取の気性に満ちた佐賀人たちがそれらの危機に対応した成果であった。両時代の兵器に焦点を当て、佐賀の特質について考えてみたい。